

聖書の祈りが私の祈りになる（旧約編）

第2章 モーセの祈り④



とりなし手としてのモーセ

モーセの祈りを支配する圧倒的な調子は、自己中心とは真逆のものです。それは何よりも、イスラエルと神との関係を一番に心配しているものです。イスラエルについてのこのような心配は、特に出エジプト記 32 章における彼の祈りに明らかです。

罪を犯した者たちのためのとりなし

イスラエルのために捧げられたモーセの祈りの中で最初に見られるものは、彼がまだシナイ山にいる時のもので、神によって新たに刻まれた律法の石版を両手に持っている時のものです。神は既に、イスラエルの忌むべき偶像礼拝を彼に示しておられました。神がモーセに要求しておられる内容は、私たちには奇異なものに思われます。「今はただ、わたしのするままにせよ。わたしの怒りが彼らに向かって燃え上がって、わたしが彼らを絶ち滅ぼすためだ。しかし、わたしはあなたを大いなる国民としよう。」(出 32:10)

この瞬間、モーセは痛みに満ちたジレンマに直面しました。彼は、神の正義を著しく損なった民にとっての代弁者である一方、神の高潔さと正義の代弁者でもあったからです。ここで理解すべきは、神はモーセに、ご自分の正義が流れるがままにせよと命令されたわけでもなければ、そのようにお教えになったわけでもないということです。神はむしろ、モーセを挑発しておられるのです。それは、彼をして、イスラエルを無傷でお守りになることはあなたにとって正当なことだと言わせ、エジプト人たちの眼前でその高潔さを保ってくださいようと主張させるためでした。真の代弁者、とりなし手とは、最終的な結果に影響を及ぼす道具となり得るのです。「すると、主はその民に下すと仰せられたわがわいを思い直された」(出 32:14)。

二番目の祈り(出 32:30-35)は、モーセが人々の宿営に帰ってきた後に捧げられているものです。神は、正義を貫くためには必要であったにせよ、イスラエル全体を滅ぼすつもりはなく、民全体をふるいにかけて、一人ひとりが自らの忠誠を公的に宣言するようお求めになるつもりでした。「**そこでモーセは宿営の入口に立って『だれでも、主につく者は、私のところに』と言った**」(出 32:26)。神の裁きのための舞台は整いました。

再び、モーセは自らの民の、見るからにひどい様相に圧倒されていました。彼は人々と非常に深いところで一体となっていたため、彼らと共に死ぬ心構えができていました。にもかかわらず、すぐに理解したところは、罪を犯した者のたどる恐ろしい運命に対しては、どれほど深く心を砕いてもきりが無いということでした。彼は、罪を犯している仲間たちのためには喜んで死ぬつもりでしたが、つまるところ、人は誰も(そして私たちもまた)全能なる方の御前で個々に申し開きをしなければならないのです。「すると主はモーセに仰せられた。『わた

しに罪を犯した者はだれであれ、わたしの書物から消し去ろう」(出 32:33 [(神のこの原則の唯一の例外が、カルバリでもたらされました。神がご自分の御子を与えてくださったカルバリ、御子が全人類の罪のために死んでくださったカルバリです。しかし今なお、神の恵みと憐れみをいただくか拒むかについては、一人ひとりが責任を負っていることに変わりはありません])。

アロンは祈り深い兄弟を持ったことに感謝していたことでしょう。モーセがシナイ山で十戒を受け取っている最中に、彼は人々の肉の欲に屈し、金の子牛を鑄造してしまっていたからです。

主は、激しくアロンを怒り、彼を滅ぼそうとされたが、そのとき、私はアロンのためにも、とりなしをした。…それで、私は、その四十日四十夜、主の前にひれ伏していた。それは主があなたがたを根絶やしにすると言われたからである。私は主に祈って言った。「神、主よ。あなたの所有の民を滅ぼさないでください。彼らは、あなたが偉大な力をもって贖い出し、力強い御手をもってエジプトから連れ出された民です。…この民の強情と、その悪と、その罪とに目を留めないでください。そうでないと、あなたがそこから私たちを連れ出されたあの国では、『主は、約束した地に彼らを導き入れることができないので、また彼らを憎んだので、彼らを荒野で死なせるために連れ出したのだ』と言うでしょう。(申命記 9:20、25-28)

もしもモーセが忠実なとりなしの祈り手でなかったならば、アロンもまた、イスラエルの他の人々と同様に滅ぼされてしまったかもしれません。彼はまさしく幸運でした。同時に、敬虔なクリスチャンたちがとりなしの祈り手であるというのも、なんと聖なる務めであることでしょうか(ガラテヤ 6:1、ヤコブ 5:16-20 を参照)。

特に重要なのが、イスラエルのためのモーセのとりなしの密度の濃さです。その祈りは、「主よ、私の民の命を助けてください」と言ってそそくさと「アーメン」と言うような単純なものでは全くありませんでした。彼の祈りはむしろ、四十日四十夜にわたる、深い苦悩に満ちたものであり、「それは主があなたがたを根絶やしにすると言われたからである」(申命 9:25)という、裁きの言葉に駆り立てられたものでした。私たちも、時代が終わりに近づくにつれて、困難な時代となり、神の裁きがこの世に下されるということを理解しているのでしょうか。モーセのように祈るとりなし手が、どれだけ必要とされていることでしょうか。

モーセのさらなるとりなしの祈りは、出エジプト記 33 章 12-23 節に記されています。それは、「わたしは、あなたがたのうちにあっては上らないからである。あなたがたはうなじのこわい民であるから、わたしが途中であなたがたを絶ち滅ぼすようなことがあるといけないから」(出 33:3)という、モーセに対する神の宣言により、急遽引き出されたものでした。モーセは、この恐ろしい啓示に打ちひしがれていました。神から召命を受けた日以来、彼はひたすら神のご臨在を願い、それに頼っていました。神が「わたしはあなたとともにいる」(出 3:12)と言われたのを聞いたからです。それが今や、神のご臨在なしに、一人で行かなければならないという可能性に直面しているのです。

それでモーセは申し上げた。「もし、あなたご自身がいっしょにおいでにならないなら、私たちをここから上らせないでください。私とあなたの民とが、あなたのお心にかなっていることは、いったい何によって知られるのでしょうか。それは、あなたが私たちといっしょにおいでになって、私とあなたの民が、地上のすべての民と区別されることによるのではないのでしょうか。」主はモーセに仰せられた。「あなたの言ったそのことも、わたしはしよう。あなたはわたしの心にかない、あなたを名ざして選び出したの

だから。」(出エジプト記 33:15-17)

ここで恐るべき真理は、罪に満ちた人類は、神の聖なる「臨在」に耐えることができないということです。なぜなら、ご臨在のゆえに私たちは焼き尽くされてしまうからです。イスラエルの人々が非常に罪深い状態にあったために、神はご自分の正義のゆえに彼らの滅びを要求せざるを得なかったのです。しかし、モーセは一筋の希望を見ていました。すなわち、神の恵みです。それが彼の願いのよりどころとなりました。律法や正義によってはイスラエルのために赦しを求めることはできないということは、わかっていました。しかし、自己の深みの中で彼は、神の恵みと憐れみがかすかに見え始めていたのです。

主は仰せられた。「わたし自身、わたしのあらゆる善をあなたの前に通らせ、主の名で、あなたの前に宣言しよう。わたしは、恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」(出エジプト記 33:19)

ヘブル人への手紙の著者が聖霊に促されて真理を書き記すはるか以前に、モーセは、必要な時の助けとなっていただけの憐れみと恵みを見出し、恵みの御座に「大胆に」近づいていたのです(ヘブル 4:16 を参照)。

とりなし手のための個人的な啓示

神の驚くべき恵みを通して、モーセは神がご臨在くださることの確信を再び得ることができました(出 33:14)。しかし、恵みが顕されると、さらなる欲求がかき立てられるものです。モーセが、「どうか、あなたの栄光を私に見せてください」(33:18)と、さらに大胆なお願いをしているのはそのためです。彼の応答は、「ちらりと見ました。もっと見せてください」と言い替えられるかもしれません。これほど素晴らしい祈りが他にあるでしょうか。モーセのこの祈りは確かに、神の子どもならば誰もが祈るにふさわしい祈りです。なぜなら、クリスチャンなら誰もが、神の栄光と荘厳さについて、さらに理解を広げていく必要があるからです。

神はこの祈りを聞き入れる準備をしていました(33:19-23)。モーセに対するお答えは、次のように言い替えることができるかもしれません。「わかった、モーセ。おまえの言うようにしよう。ただ、知っておいて欲しい。おまえでさえ、私の栄光が完全に顕されると耐えられない。そこで、私の民を治めるリーダーとして十分なだけ、かいま見することを許そう。そして、おまえの幻と信仰を大きくしよう」。このお答えは、あらゆるクリスチャンにとって励ましとなるものです。

「栄光」という言葉は、限りある人間にとっては少しつかみどころのない言葉です。これはおそらく、それが実質的に、神ご自身の全てを指し示す言葉だからでしょう。栄光という言葉は、神という言葉とほぼ同義なのです。22節を見てみましょう。「わたしの栄光が通り過ぎるときには」、および「わたしが通り過ぎるまで」とあります。神とそこご栄光とは、切り離すことができません。一方のあるところ、他方もあるのです。したがって、モーセは目がくらむほどの明るさ以上のものを見た、ということになります。また、栄光に満ちた神の本質…憐れみ、真理、きよさ、愛、忍耐、そして善を見たのです。

主は彼の前を通り過ぎるとき、宣言された。「主、主は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者、罰すべき者は必ず罰して報いる者。父の咎は子に、子の子に、三代に、四代に。」(出エジプト記 34:6-7)

苦悩に満ちたモーセの懇願に神がこのように応答してくださったことで、モーセは旅を進める準備が十分に整えられました。神からの新たな啓示によって、モーセのとりなしの祈りには新しい確信が与えられたのです。神からの特別で個人的な啓示を体験していなければ、次の祈りは決して彼の唇から出てくることはなかったことでしょう。神の応答は、かたくななイスラエルの人々を滅ぼすというそれまでのご決意から、はるかにかけ離れたものとなりました。

(モーセは)お願いした。「ああ、主よ。もし私があなたのお心にかなっているものでしたら、どうか主が私たちの中において、進んでくださいますように。確かに、この民は、うなじのこわい民ですが、どうか私たちの咎と罪を赦し、私たちをご自身のものとしてくださいますように。」主は仰せられた。「今ここで、わたしは契約を結ぼう。わたしは、あなたの民すべての前で、地のどこにおいても、また、どの国々のうちにおいても、かつてなされたことのない奇しいことを行おう。あなたとともにいるこの民はみな、主のわざを見るであろう。わたしがあなたとともに行うことは恐るべきものである。(出エジプト記 34:9-10)

? 質問

1. モーセは何を最も心配して祈っていたと言えますか？ 神がモーセに語られた (出エ 32:10) のは、モーセが何をすることを神が期待していたからですか？
2. モーセの祈りにおいて、特に重要なことは何ですか？ 私たちは時代が終わりに近づくにつれて、神の裁きがこの世に下されることを理解していますか？ そしてモーセのようなとりなし手が必要とされていると理解していますか？
3. 神はご自分に従わないイスラエル人とは一緒に行かないと宣言されました。ここに見られる「恐るべき真理」とは何ですか？ このような状況でなぜモーセは希望を持つことができましたか？ だれかのために祈る以前にもう無理だとあきらめてしまっていることはありませんか？
4. モーセの祈りの中で、特にすばらしく、神の子どもならば誰もが祈るにふさわしい祈りは何ですか？
5. モーセのとりなしの祈りに新しい確信を与えたものは何ですか？ あなたは、神ご自身と出会うことによって確信が与えられ、さらに祈ることができたという体験がありますか？